

# 本物夫婦NTR

## ～監督の目の前で妻がよがり狂う真正生中出し成長譚～

### プロローグ 出会いの予感

薄暗いスタジオの照明が、汗と化粧の匂いを浮かび上がらせる。  
2026年1月、東京・恵比寿の片隅にある某AVメーカーの撮影スタジオ。

今日の作品は「人妻不倫温泉旅行」。メイン女優がベッドで喘ぐ横で、私はただの背景だ。

名前はあかり。25歳。長崎から上京してエキストラ歴3年目。  
脱がない、絡まない。母親役や友人役が定番で、今日も「夫婦の知人」として、浴衣姿で廊下を歩くだけ。  
でも、現場の空気はいつも私をざわつかせる。  
カメラの向こうで、女優さんが本気で感じている姿。男優さんの腰使い。監督の「もっと奥まで！」という低い声。

全部、遠くから見てるだけなのに...体が熱くなる。

「はい、カット！ 次、照明調整！」

監督の声で現場が動き出す。  
私は壁際に立って、スタッフの邪魔にならないよう息を潜めていた。  
すると、若い男が近づいてきた。  
ADらしい。Tシャツにジーンズ、首にタオル。汗で前髪が張り付いている。

達也、28歳。まだチーフADにもなっていない、現場の雑用係。

「すみません、ちょっとここ通りますね」

彼は大きな照明機材を抱えて、私の横を通り抜けようとした。  
その瞬間、機材の角が私の浴衣の袖に引っかかり――

「わっ！」

袖がずれて、肩から胸元までが一瞬露わになる。

もちろんブラは着けている。でも、肌の白さが照明に照らされて、まるでスポットライトを浴びたみたいに輝いた。

「.....っ！」

達也の目が、一瞬だけ止まった。

慌てて機材を置き直し、頭を下げる。

「す、すみませんでした！ 大丈夫ですか？」

私は慌てて浴衣を直したけど、心臓が早鐘のように鳴っていた。

「だ、大丈夫です...」

彼の視線が、わずかに私の胸元をなぞった気がした。

いや、気のせいじゃない。

あの瞬間、彼の瞳に浮かんだのは、ただの謝罪じゃなかった。

欲。好奇心。そして、何か...抑えきれない興奮。

それが、私たちの始まりだった。

## 第1章 現場の出会いと、ざわつく心

撮影が終わったのは夜中の2時。

みんな疲れ果てて、控室で着替えを済ませる。

私はいつものように、素早く私服に着替えて帰る準備をしていた。

すると、ドアがノックされた。

「...あの、さっきのエキストラさん？」

達也だった。

ペットボトルのスポーツドリンクを2本持って、照れくさそうに立っている。

「さっきは本当にすみませんでした。これ、差し入れです」

私は少し戸惑いながら受け取った。

「ありがとうございます。でも、そんなに気にしなくていいですよ」

「いや、ほんとに申し訳なくて...。初めての現場で、緊張してたんです。俺、AD歴まだ半年で」

彼は苦笑いした。

その笑顔が、意外と可愛くて...私はつい、言葉を続けてしまった。

「私もエキストラ歴は長いけど、毎回緊張しますよ。現場の空気って、独特ですよ」

話が弾んだ。

達也は大学を卒業後、憧れでAV業界に入ったこと。

監督を目指しているけど、今はまだ雑用ばかり。

私も、長崎から上京して最初は「お金が欲しくて」エキストラを始めたけど、だんだんこの世界の熱に惹かれていること。

照明助手にも挑戦したけど、結局エキストラに戻ってきたこと。

「でも、あかりさんみたいな綺麗な人がエキストラでいるの、勿体ないですよ。

演技も自然だし...さっきの袖の事故の時、俺、ドキッとしました」

彼の言葉に、顔が熱くなった。

「...そんなこと、言わないでください」

「本当です。俺、現場で女優さん見てるけど、あかりさんみたいな清楚な感じの人、珍しいなって」

清楚。

そう言われると、なんだか悪い気がした。

だって、私の胸の奥では、ずっと抑えていたものが疼いているから。

その夜、帰りの電車の中で、私は達也の顔を思い出していた。  
彼の視線。謝りながらも、どこか貪るような目。  
そして、私の体が反応したこと。

浴衣の下で、乳首が固くなっていたこと。

「...私、何考えてるの？」

でも、止まらない。

あの現場の熱が、私の中に火を灯してしまったみたいだった。

翌週、また同じメーカーの現場で会った。

今度は達也が、私に声を掛けてきた。

「あかりさん、また来てたんですね。今日もエキストラ？」

「ええ。でも、今日はちょっと...監督が『キスシーンがある役』って言ってて」

私の言葉に、達也の目が少しだけ鋭くなった。

「...キス、ですか」

「エキストラだけど、軽いキスシーンだけです。夫婦の知人役で、酔った勢いで...みたいな」

彼は黙って頷いたけど、その表情に、ほんの少しの嫉妬が見えた気がした。

撮影中、私は初めて「キスシーン」を演じた。

相手はベテランの脇役男優。

唇が触れるだけの、ほんの数秒。

でも、カメラが回っている前で、誰かに見られている興奮。

体が熱くなった。

カットがかかった瞬間、達也が近づいてきた。

「...大丈夫でした？」

「うん。でも、ちょっと...ドキドキしちゃった」

彼は小さく笑って、耳元で囁いた。

「俺も、見てて...ドキドキしました」

その言葉が、私の心に深く刺さった。

この人なら、きっと...私の全部を受け止めてくれるかも。

そして、私たちは連絡先を交換した。

## 第2章 付き合い始める

連絡先を交換してから、1週間が経った。

LINEのやり取りは毎日続き、現場の愚痴から好きな食べ物まで、どんどん距離が縮まっていった。

達也のメッセージはいつも丁寧で、でもどこか熱っぽい。

「今日の現場、疲れたけどあかりさんの顔見れてよかった」

そんな一文を読むだけで、私の胸がざわつく。

そして、初めてのデートの日。

東京・渋谷の喧騒から少し離れた、代々木公園近くの小さなカフェを選んだ。

2026年2月、冬の終わり。空はまだ冷たいけど、陽射しは柔らかかった。

私はシンプルな白のニットと膝丈のスカート。

達也はジャケットを羽織って、少し緊張した顔で待っていた。

「遅れてごめんね」

「いや、俺も今来たところ。...あかりさん、今日も綺麗だね」

照れくさそうに言う彼に、私は小さく笑った。

カフェの窓際席に座り、ホットコーヒーを注文。

話は自然と、現場のことに戻った。

「この前、キスシーンの撮影見てたよね。あの時、俺...正直、複雑だった」

達也がぼつりと言った。

私はカップを握る手に力を入れた。

「複雑って...？」

「嫉妬、かな。まだ付き合っていないのに、勝手に。

でも同時に、興奮もした。あかりさんが他の男に唇を許す姿...

それが、すごくエロくて。俺、頭おかしくなりそうだった」

彼の言葉はストレートで、でもどこか震えていた。

私は顔を赤らめながら、目を逸らした。

「...私も、ドキドキしてた。

キスしてる間、カメラの向こうに達也さんがいるって思うと、

体が熱くなって...おかしいよね」

沈黙が落ちた。

でも、それは心地よい沈黙だった。

達也が、ゆっくりと私の手を取った。

「俺、あかりさんと付き合いたい。  
本気で。  
この業界で、こんな気持ちになるなんて思わなかったけど...  
あかりさんの全部を知りたい。

現場で見たあかりさんも、プライベートのあかりさんも」

心臓が鳴る。

私は小さく頷いた。

「...私も。達也さんと、もっと一緒にいたい」

その瞬間、彼が私の手を強く握り、席を立った。

「ここ、人が多いから...外、出ようか」

カフェを出て、近くの代々木公園へ。  
夕暮れのベンチに並んで座った。

誰もいない。風だけが、木々を揺らす。

達也が、私の肩を抱き寄せた。  
温かい体温。

そして、ゆっくりと顔を近づけてくる。

初めてのキス。  
唇が触れた瞬間、電流が走った。  
柔らかくて、優しくて、でもどこか貪欲。

舌が絡み合うと、現場で抑えていたものが一気に溢れ出した。

「ん...っ」

私は小さく声を漏らした。  
彼の手が、私の背中を撫で、腰を引き寄せる。

キスは深くなり、息が苦しくなるまで続いた。

やっと離れた時、達也の目が潤んでいた。

「...やばい。もっとしたい」

私は頷いた。

「私も...」

そのまま、タクシーを拾って近くのビジネスホテルへ。

部屋に入るなり、ドアを閉めた瞬間、再びキス。  
今度は激しく。

達也の手が、私のニットをたくし上げ、ブラの上から胸を包む。

「柔らかい...あかりさん、綺麗」

彼の指が、ブラのホックを外す。  
露わになった胸に、唇を寄せる。

乳首を舌で転がされると、腰がびくんと跳ねた。

「あっ...んっ、達也さん...」

「感じてる...？」

現場でキスしてた時も、こんな風に感じてたの？」

その言葉に、背徳の疼きが走る。

私は首を振ったけど、声は震えていた。

「...違う。でも、あの時も...体が熱かった」

彼は笑って、胸を強く吸う。  
もう片方の手が、スカートの中に滑り込む。

パンティの上から、秘部を優しく撫でる。

「濡れてる...あかりさん、俺のこと考えてた？」

「うん...達也さんのこと、ずっと...」

指が布越しにクリトリスを押す。

私は彼の肩にしがみつき、喘いだ。

「はあ...っ、そこ...」

達也がパンティをずらし、直接触れる。  
ぬるぬるとした感触。

彼の指が中に入り、ゆっくりと動く。

「気持ちいい...？」

俺の指で、イッて」

私は腰をくねらせ、声を抑えきれなかった。

「あっ、あっ...イク...！」

体が震え、達した。

達也は優しく抱きしめ、私の耳元で囁いた。

「可愛い...  
でも、これからもっと、俺の前で感じてほしい。

現場で他の男に触れられても、俺のことだけ考えて...」

その言葉が、私の心に深く刻まれた。  
嫉妬と愛と、興奮の渦。  
私たちはその夜、何度も体を重ねた。

まだ本番まではいかない、でも確実に深まった絆。

朝、ベッドで目覚めた時、達也は私の髪を撫でながら言った。

「これから、俺があかりさんを守る。  
でも...あかりさんが女優になる日が来たら、

俺はきっと、壊れそうなくらい興奮すると思う」

私は微笑んで、彼の胸に顔を埋めた。

「...その時も、一緒にいてね」

二人の物語は、ここから本格的に始まる。

あとがき（サンプル版）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。  
まだまだ序盤ですが、この先の物語はどんどん加速していきます。  
エキストラの清楚な妻が、少しずつAV女優として堕ちていく過程。  
夫の嫉妬と興奮が交錯しながら、真正生中出し、複数プレイ、公開調教、そしてS覚醒へ....  
そして、最後には「本物の夫婦」としてファンにすべてを晒す、禁断の最終章まで。  
「夫の前で妻がよがる」その一線を超えた瞬間を、リアルに、残酷に、でも愛情たっぷりに描ききりました。  
嫉妬で壊れそうな夫と、快楽に溺れながらも夫を想う妻。  
あなたは、どちらの気持ちに共感しますか？  
この先の展開が気になる方は、ぜひ本編をご購入ください。

ここから先は、もう後戻りできない背徳の快楽が待っています。

最後まで、優花と達也の物語に付き合っていただけることを、心から願っています。

（続きは本編で.....）